中村俊定文庫
文庫 18
182
1

寛文丑　[illegible]

七月十七日　母霊夢

人目の八重垣こそ[illegible]

[illegible]れ宝[illegible]

七夜　晩

住吉の松を[illegible]

[illegible]る神津[illegible]

寛文九　酉　九月廿二日之

東叡靈夢

云のくゝ仰せとゝものも門まる柱重て

いつきてゝるハたちつてとゝ犯

十歳入學　大圓寺

十四歳　於堀江町　本草綱目写

俊治　主治發明

十五歳　内經素本　易經素本写

蒲生五郎兵衛来需之　伊勢物語書之

右表帋出来本多下野守殿へ献之

右ゝ寢義くゝて刀　ト佐以

十六歳　草刈三越講筵

服部平助講述

四覺寺　太巓和尚詩學　易傳受

十七　桃青廿歌仙

十八　延宝午　發句合　板風　五十句合作

秋洪水

廿　延宝申　次韻　作風七百五十句ニ對

辛酉

壬戌冬　於鉢木聘

天和　癸亥　栗　於芝金地院前

貞享甲子　於京　蠶集

丙寅　新山家　歌の記

丁卯　續ぶくろ　撫子

四月分物務尼卒　五十七歳

元禄之　上京　李吟亭講歌書

十一月廿二日　宗隆尼卒　於堅田葬八十四

元禄二庚午花つみ二巻一夏百句 揃ふく

四辛未

雜詩集 二巻 揃ふく

五壬申

六癸酉八月北方東吹辛 萩の家揃ふく

行年七十二歳

七甲戌 句兄弟 三巻揃ふく 上京

十月十二月 芭蕉辛 五十二 杉尾花 揃ふく

栗津義仲寺揃ふく

九丙子

庭竈牛も雑煮をすりけり

十丁丑 うゝわらく 二巻揃ふく

十一月 戊寅 十二月

寛文　延宝九　天和四
貞享五

蠡集

雜談集

虚栗
續みなし栗
新山家

花摘　上下　非人合
白兄弟　上中下
枯尾華
わらべ名
三上吟跋の変

末若葉　上下

元禄十三　十月
三上吟
元禄十四　六月
焦尾琴

右其角翁書捨置レシヲ摹シテ爰ニ出ス
此外類柯子一集上中下アリ年紀ニ
モレタルヲ以テ記之

淡々撰

相田文庫

一元禄辛未歳門人春雄詩集ヲ作テ要ス
のんぬしゝ先師ゆくめぐりて一流雅ヲ
めゝとゝとゝむ立ちもふ一平要ねん
をくみて雅俗をあはせ洒落のみもてまき
ゆ我ゝ也　詩ことゝ句作ふるのんぬを
都鄙の人ゝ示し一流のうゝもを解ん
とれハ必他の俳ゝとゝんる任地ら
をゝんのゝとのゝ其紙次第するもも
あれ我ゝ出ゝ作るかゝ事を用松山の

中村俊定文庫

大事なる情をくめ所を見る所の例乃流弟子の
ことゝすみの人〳〵お除し出給りたる
たゞ事か自ものとあるる所
「沸秘義」を筆紙すべて梅之丞
法乳弟聖とまいり〳〵李白をすゝ〳〵
春人ゆるいきゝかられもゝれ
もよぶ〳〵

法〳〵
角や自敵ゝ十とせるとも梅の花

渭一北　春一天可二以見一矣　祇空

と十三回の孫八の〳〵

渭北ハ平カ前之名也仍作ル

一古き器物なる風人光侯ゝ方よ遊ひ〳〵
ものゝ〳〵詩人乃求め給九つゝの茶今え
おゝのもよゝれそ似ゝる大方歟
き九壺ゝとゝめ出〳〵渥よ行つゝ〳〵
ゝひ〳〵めゝる紙光侯ゝ〳〵きのゝ乃
法物ゝきゝゝと九つゝを永出されゝ節二
義よ落ゝゝ西角乃ゝきゝとゝり出〳〵て

てを全辨義をのなりすべてを絵を画工も
同じるものなれども金言をを説物益くその執
を離れて小乗二義をふ〳〵義の常〳〵
いとれハ風雪ふ〳〵永道をたゝき角ハ
角なるもを根をとゝ尺又我道我
破拝しをよるを求め〳〵信多〳〵ゑめ
教をふるを往〳〵一百の学ゑ天下を
覆〳〵といひもひるをしをもて
句の押ふるハ学きて合ふ者ハ四百

五十句余もあるを五を無方ゆへ成て
同又ふるひて宗をもるを魂つゝ案られ
義をえるもを人れ義を肉とひやしと
目をの風雅を表を要をの的を中りを
小二義のをふを学入をを未練の表
八代情をを〳〵臨〳〵てをを句
を求めるも師匠を報ふ乃ふを自
慕自弃ハみつゝいまめて気我
を向とれをのをふをを我風とをを

此説イカヾ

とゝ以て句表に似く似ぬこと
二家の傷ましき及ぶ所ゆゑんの
やうに死ぬきもくてきもくて蛙なき
八九間空にて雨ふる　柳一哉
ちるきく咲やみて人乃あやめ舟
そゝろに人の云句めて義の照みて
字ゝ死れ咲やや五月（オツキ）のと情ゝ
に　あれ沢れけ　ら昔の大雨の名月を
れもしゝそゝ

一去ゝ方ゝ見る対ま月ふんやすゝみ
ゝゝ時ゝ対話の時ハ仏ゆゝとゝ
今ゝ行あゝ或人四ゝ八ゝ近し
数せゝあれん其ハ孫ゝやゝく
歳　義ゝふあゝとおゝみる八ゝ
三句ゝゝ見ゝきゝゝゝ
一言ゝ保ゝ実ゝ門生大雪歳花月六百韵の
一集をつる句の字ゝ詠ゝ古ゝあゝ警
衛藝倒ゝ方ゝ遠近新古のゝきまゝゝ

北驛綿或は勢句といふ事初心のうあり
予が書を加へて集成くのち接之吳邑
の謝士知大とそ人まよ時陽よ来る
勢句とはいふ風乃手めやいまさ不空老
他の人みは拙さとそれをお嘯き
老ととそ中きる見あきらはんさ
と半ハ詩るまあれ河れる時予
答ふて曰て梁惠王の下と生て
曰四海を内不治如之何王顧左右而

言他は拙句よ老とあらう之発
て古巴ちとは一年解ちらつきまはハ
ちよ他をとそとはんをつくる
音風の孤金と吹そふ火のとき式とに
ときみのんまてあてハ河も答る時の
時まあるとはとめれハひまらふつき
ちちよ予門よ入てきてと名とあるあ
越の老山尼ちんとちり姉よ生ちら
北之の人まて老ふに

一五月雨は初夏のうちうよき句なし
とあるのみ一句あり　只春雨の句さへ
――とて
咲月はけいとすきと二つのうち
すきこれも上句のかりて是
とてすきみせられるかの宗匠
宗匠なるの狂句を彩りすきけ
ふて共に二年板上行るの摩訶苦
ものとなるべし

一利休居をとつくりたるとき
樫の葉もちぬるを取つる男ぶち居て如き
古の作一句と書よいれるとそを別ハ
冬月枯海のなる木百うなり　宇宙
古城ハ山とて井とおもはしとて
されば冬ほ半人のうえ倍なるべしもなる
さらしたち句の一格者くんつけなるてハ
つるべし　ユまとあるを半月を生つ
ものとかの句をつくんあハ

老雲と尼ゆえ老うしみうしの
うしの山のうえ さうりうも

又ハ 獨有ニ南山住花、発ス
東籬去テ菊ノ人、遊ニ

附句ハ

あんんしんきもやつのくみえん
義仮ハうのまゆきしきし秋

曲ハ 人ハ行ん 江上数峰青

一 ハ解スベシ こゝを解ラヘ うえのつゆ
ありとて

呂慶 東南柳 乾坤日月浮

角ゥのやいやれ 秋風の花ゆきまき 半角

これハ 其心ゆき

11

?

一 四畳半やはさまあぬ山うつゝとき角より野
ゆれ白ちうう酒杯をいまめ
んを降ぎるうそを秋は白を受て酒醒る
日あわせ白れ白世情へうたと動乱を
ゆきれうとそもいよ感あり

一 俗吟て雪やうあきを一概よ似ようちみる
あれ草姿ゆるまうといふるとそかうる
山寺ようひう 御帰雪を半ちまく
伝ハなかまよんれかなくきれ

一 蹈花の歸香とは古代語にして花を踏みて
さらりと画工のあやまちなりとて工業
満てこれを蝶のとまりさるとて答へ
あるとき和尚三ようひらひらと跡を蝶は雪ふりて
さてさるまかる一年をとひかけてあへし
先以句集出来三の発句をよこせ
ひらひらやとかりしとかりよりきたりて
みのの十四郎殿侍ちりはてをは少焼
末流の称ありとなりすくきまちり

一二月名集 こゝ緑成る歳の撰
一年は塚を好ぶし去れば水流
その集の中よりてもる要夏冬式の列を
書て去二月廿一雪独り寄仙備
一今利小松さらよ又花の葉流
防風の若葉出る江の月 今年雨ふる 責流
震を探えや旅紙治ず結て 伯徒
趣て判小押めをのとて 浜河 今年見ふる
風呂まるき南はそひちり 海通

いちもの泡沫嚢栗をかくす　狐堂

下略

同集に予懐舊の文章あり　取敬

五色の今もみて世余人を寄近ちあるく
席よつきてひとへは時ちるもうり要よ何と
おもひ出るれ予よりの物のむもを思ひ出る時
人々もちうと云辞りうて所業出きて
○廿三句まて亡師ん尽たてもて
ひるうてれおもひ面ひてり人目考

うすさも中くん所うて所丈四句ある
かんてんの紙ひる第八第乃月
とひ出れいさうてかくれ時の金花花ハ
句よ考むへうたくんの花て句ひもみんを有
例の破行まを眼考第ち必ちせてきれ
るる金花第子の句二句庚て三句あみる
あくて金伏する事となれるち謝句
却て道甲嫁ち唐花のるなるもり
花ちはまくおうみて考うくく

さ師の後へよとハさうなる又ちち母抱
きて出てむをとうるんとてやおもふんだと
をおもひ出て後ハ思ひ出さきにけるを年
ゆり入雲うをとく伴の彼坊主あるとも
川へき去ふう文育すてん短く道ハ
不敬ちりけるとてとへと其角手紙
入れるより手よれちうを過て文章
骨髄を通りぬ　清し
桃柳咲せき孫乃光りう角

山吹の尾ハちく地を約ん
一すみ沖へ白れ波ハあけて
毎日寺を保うす　大
溺てもとる日よさうや夜ハ宵　宵
涼を風ハ京（ミサト）ちりうり
花の雪引出よあり夜へ
ウ　いろう信　友　鼻ハめ　粒
盧子ち俗ハ琴の俗ちま　数ちう
ひんと掛き大仰の紙

人ゝ多くはこれを化粧をせめて紅
世よあきて地枕よりさく
獣よりまてハ水ハ多の海
むらハ汁よ脳よさうなる
ゝよ書るるまんあんぎたうとをけき
あらめんとうを土佐流のも簡
笑よ入り芸よやあ行紙のうを薄命をとろく
ゝ車をとり
夏の目と同年ちり筆ゝ髮

くりゝと及まる熱さ先
陸の絵を彩る絵ゝは
杭のうちる嘘幣沈
すまふ丸の移せ柳をお傷
おむろ丸ゝ絵ゝとは家ゝう嘘
まうつるをみつゝそうき松の雨
指をてくる絵丸とう舟
作せんひすゝ俺て生とゝ
手を又てゝあるを掃

手物よ小野の文婦伊勢参り
旋花
ちるひとくきも合ふ　唐
簪をかさめて流し安く
恋をいひ学ぶね白粉うるね
門を粧亭のぶらるれとこ山
笑を世を置実ハせきうり
玉つき擁敏の足ハかきとれん
月明あ一寝せぬ大酩
稲の茅置れおぼを矣うん

根ふ一うみて木芽れ物
茱ハ餞を梅ようとうを近き
ふい〜ふいて去を似をても
ちををとうぬ数ハ九ふね
新乃賞樹ち後夏三帝
遣る明門ハ黄ハ花の石
明星言一　ハつれて
一古来六花ハ発句服市三ふて笑一四句
めら面人句北乃ふハせぬ事ちそ徘連

芳しく同じく貞徒ハ又

一き角者ゟ蕭と云ふ兩鬢吹華髮萬事不
理醉て後醒て自ゟ吟じられる
華髮ハ白髮の半とて
一ゟ白ゟ白ゟ又ゟ白ゟ
白ゟ白ゟ白ゟ白ゟ
一貞徒ハ紙ハ白ゟ白ゟ白ゟ
金言まゟ徒道の徒として大器晩成の
一ゟ徒ハ二つゟ白ゟ二つ白ゟ

あゟ言葉ハ徒ハ安のゟゟゟと
迷人ゟ白ゟ時者つゟて音山科ゟ
八年貴と云徒ハ利休を招待ゟ内ゟ
ゟゟゟ白ゟ白ゟ宗易
まいられ白ゟ片見ゟ白ゟ桐伊の
人蕭末の白ゟ白ゟ白ゟ
上の土彩ハ白ゟ白ゟ白ゟ
ハ白ゟ白ゟ白ゟ白ゟ
ゟゟ白ゟ白ゟ白ゟ

あんハあやまちなへしといまれなるまれなる
きゝとうちおのゝきなる時 風雪甚なる
眠りいるまなる記あらてかきれ利休の
おとゝ宗とよきか句あけさりしなるのてを柴
三つ星とゝ人〳〵勧進とまんとるの松ハいひ
つれ泉てきまひるすゝこつとかゝるを
宮や樹も凍てしや月も冴もされハ
刻ゝ山ひ並て見れなる庵あるを
き角へゝられハ郭公や利休の庵宗

鶯やのゝ初ゝもとあて登り道ゝ鶯やとハ
風雪ハ宮初ゝ出ゝへしゝ宮ゝあゝて
人ゝあつけてゝる加へしゝ山ゝちとゝ
まゝと決ゝしゝれなる雪中 風雪 投名
寒ねゝゝ行るゝ山ゝて山中の句ゝ
きれ鶯やときゝあ作つきき角もゝ
とあゝゝ宮ゝ人宮しゝ山くさきハおゝ乃
るゝゝちゝ宮ハあまのゝ又渕底
利ちきみまあれとハ芭蕉の首へき

[illegible]年ハ句を吟ずる作ってハ、
[illegible]ひらすの紅を遊ぶて作ハかも
[illegible]句をけるまるかるかけ
[illegible]と成へくれ
一枝の梅の行ふ[illegible]軽一句を遊とふあり文忠公
梅聖俞もし一年をけて過ノ字磨滅
[illegible]一句を捉て一句を去ル
[illegible]及て過ノ字より一字乃
工夫とする短[illegible]ある事和漢同之の[illegible]

勝て数ふへくれ
一句の句あれとその句あらと云人序
此道[illegible]ハ[illegible]ときれ白
髪三千尺の句こそ
竹家山三句ハ
[illegible]
杜宇者[illegible]
[illegible]
[illegible]

と云ふ江東くさ草に入れ入れたきたるは
和の字もすひて下俗古実て甲斐なと句を
乃黒白まぢるはいひ多人あきら
らまり俳のうるはしくなりてをもすし
てをくすく拙なり句れんたう笠を俳句
和ときけ和歌や和と実和なるく
みなりありきれりおひくるきし
をすしてなりなるをいふ　まりをまをし
をして詠ふべき乃なり

一当時顛倒の句多佳境なをくるかく
ハいれまし品正風体よろくるなおおもハ
ふきていひおもるのはすすふれ東坡
花雨亭記云亭以雨名志喜也亭以
花面名といそく文章のハあり折開顛
倒とらら又擬貴を以俗おうし乃
句をいそのかるちおけ俗すとやをく生成あを
はは悦南時すくふうれうにふつむ詩ちつ
の山談と續ら句ふハ曲みうく出あり時

まうして

やまと絵の筆法にて花瓶

一とせ　月輝のうし時まちれり物ふとあり

り花瓶まあらうこしらいとけう

大うのつきをめてうそてこの

つるわか人のおひとあるものと云奇よかを義の

南柯きもしとひ夫なる国をさして狂あ

とかせられるよし　緒方（ジギオビ）となれるあへ考（カンガ）へ

おハ相いとうんなる光とあをいおひ水ハ月

尾いうしくそ侍る南柯ゑをきてき

るうん後人のさ[illegible]へきれ　荒馬（於以万）の仮

名ちう

一当時影の手をいそて一句を絵ち

ひ多くる我影をぬきてもちん公き

手よあうんとあ老郎のいひ[illegible]ひ今の

仮者ハめ[illegible]きとる考ちう分なせる

夏きちめ見せるるまちう詩をハ狂歌と

ひ又当の絵と遊ちう

それみな句ふかハ立春の枝も　ふるかな春
しをれ野ふるゆきあれ又も秋の雨の残を
句ふ春ハ生きんいひまふをと或ハ何り或を
んさまもつあきもかひるもあるとして
ふる年ハ甲斐なき我へし基佐を乃丈
三ヶ

京都を妻と月ハ康明して
一ヶ　とこめられさう沒や結髪知
乃俳句何とを論すくんや

陰改とつかうんをやせかうをゆ山と拾角
発句と作ってあって京師ハ春乃せ
ゆもしばらく作配を寄せ

一昔ハ獄の前ハ藏菊ヲ兼ニ輔相獄ノ前
ヲ過キケルニ獄囚一人走リ出テ是ヲ抱テ獄之
内ニ入レユノ菊ヲ頭シテ一首ヲト望ム輔相郎
詠メ
人や枝おのれやおひ　きくの花
えをもとうつるいろ乃いきと

獄囚斂款して免さんと云し甚以て益欺
侮の士孫[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]獄囚一人を[illegible]出て輔相を門
内へ招き入れ[illegible]といふ[illegible]
をつとめて囚人を入し[illegible]
一字[illegible]を誤る字ハ太史公の名を更
同じ字ハ通して誤字一字も[illegible]と流布
乃雑説ハ[illegible]傳作趙談ハ趙同作[illegible]
名を改名を避る而已[illegible]誤る字二三[illegible]

知せり又[illegible]懐山炭を呑て唖[illegible]
乃ち呑炭の[illegible]
そのあり婦人[illegible]乃ひら炭音と
云ふ[illegible]を呑て唖[illegible]炭
のなと炭乃字[illegible]
をつぶし炭を求[illegible]
[illegible]
それハ学文の首[illegible]の瑣細[illegible]
あるて大[illegible]笑ハ独[illegible]輔の玉

きて彩を欲あつらせるかれ及やう
成しとみつゝ恥る分別ひとよんる
きるなり白き章とする一概を倫別
一番より新遊ひより出て人〳〵異紙をひる
宗匠の句ゆてゆせるゆへとられ
名ばかり角ふと行ようへ一大事れ
ゆるゝと正色赤眼んゝ紙をもて
用ゆるもや用る三巡りの神なるん
いひたて代宗匠雲紙乱一雷魚を

何人ゝ事所をうけける事まれあらう
よあるゆり一条乃ゆ語るゝゆ出れ発るゝ
数くます きふ巡の感る業
一とせ紙宝ゆ乱る新き作る字巡千
泉ゆと云をとゆゆる引出るを紙上麻績と云
割るやと新大面杉板と貼ふ人〳〵るゆ
こて思ゝ風維の神を行りる面と
云ゆゆて西り上人の名を吹上の神を
ゆとのゆを松ひひて下ゝ依訪の神

うきとふきなびきて
あきぎりはたちこめ空てり狂
雨しきりせる海辺の神風
とゝのく御ゝ社おがれはるゝやき
竹ゝ葉風面納ゝとそ人〳〵神威あらく
笑ゝ〻ゝ詠士の奇才功あれは光あり
何ソ志ゝ〻ん哉晴雲ゝ日し
也日のゝ秋ゝあゝ乃みゝの京
川波清くすめる月ゝ
東陵の秀句を思神のゝとゝく伝後の僧正

赤剣の命行るゝひとくゝ風雅の風
なのかゝ月と唱て痕乃れちゝゝゝ
使〻し

春歌

あゝ乃茅ゝ宮湯治立ゝ
内宮乃拝百蘿髪乃華川を
御ゝれハ額ゝ余ゝ宮ゝ
和歌ゝあゝ乃ゝし

上己

庚田ゝゝせゝ桃乃花使

つゝきの紙雛宮　山うら

平安時

孫へ尺くらゐを新て蒼苔日

草の新芽や洞へ入る迄蒔き傳ふ

宮殿みゝく

春の日や孫を漕ぎて笑ひ合

春山和尚ら俳を作りて

来て切るの仕や木こ乃巻

紙雲うゝ父はれれるまゝ

目ゝかるゝ柱みゝんあふ印木

遠方

稚子乃雪あるさゝき木蝋

よりみよりの湯みて

けゝく車一般　ゆゝきん

歩みゝ木いまき楊家の根ふ

年の一波こゝのゝうゝ

待ゝ印

ぬゝを和て寝ん秋雲

乃すゝ乃紙園清水和雪

夢裡感

さゝ波雨ふるたゝ雲のと詠まふ
下の句石面をはしりてたゝなはつめ
ゝ宋好よ詠て呂りふは睡て夢ま
ゝ武乃牡丹ふ新其角蕭こと
絵と立ま乃作めて鍋墨をとゝきてひと
ゝ雪やき傷ふ徨こ為ゝ節ふ力神ふ
面てて為人の乃ふあふ気ゝ上
皎紫陽のゝちふ脳まとゝ枝ゝて

か句やあゝとゝふふ花ふ尺禁制道
のもゝひ形と花の貧句を作ゝ面反咲
ゝまふ花を御るおのゝ呂ふ咲ふ
ふあゝて呂の乃ふゝ晋ね教ゝを
咲ん為乃ゝふみ為ゝきと枝ひてを
人乃ま拾ゝ志ゝきゝ乃ゝ蕊ハ一句乃
ま乃ゝさ為ゝ又ま年の一気ゝて先
ゝて句を作を人の為咲ゝ欲石
川や苔みの小川乃奇おひ合ゝ山橋

高野山にて倉子のうへをとひ
出せし人より行て新しきまゝ
上てのちいつへし況や今日の旬なる
魁（サキカケ）とんぼ成ものをもかぶりつく
きて風を却て侍りよあつへ引や
おせめうるさきまつの人裏おやまん
して風情を遂て孫ハ天下乃
風を富うしめ感魚のうくしとも眼
中より光りうしハ宇宙のうく面ハ紙の

てをおく俗雑気色虎を数く拝
四んとおのおのあれのいくらの年屋
後の種をかぶるまちくうてよ多まく
ゆ見れ芋や今さそんとやうやく
下の句成おひ出し遊魂不遠て
又ものを遂ふるうき角は文ぞる
う数洗ふ水乃濁りや下何ものを
文乃奥をあり永ふの名の土地の名
めていと無あり

一花男女集る花雨花霧非霧の
名月人みなとも（き後さやあの水落
のか白綱道乃一集る不入廣茅の吉
を考へき奥すり
一ち一合てうといれんてうハ白老とれ
らとハ翁かき角ち古郡一道て大道
金言ちする感を以ん中ちなハ白
川よ行とをめて
のうれすむ宮ハ新の白川も
うきせる　ちとき秋乃ぬく

ないこ度行ようきるく酒ちと行くす
みあり山の月紙　ちやけ秋乃
竹木の風山月北樹て雲ま走る
かるこめ表ハ往くも求めき貧ぬを
一熊伏先生開東る富花の時人く表
都をそるよ論語乃政箭北辰の集
ちうる花て衆星れこれるむるとを不
こ帝を後れるいるめるも傍人の
夏ねれを聖借ハ光度をみてんうう

世人をつけハ所にて出るべし
とてあるべく大ゝ成るべきすて道と
呼時ハ道とてきの所にきとゝろの
なり雪月花ハ四時ハあるまし月花
人無てきの詠作成ぬみて日数遠去
とあるべひ新とまねき古きとたゝて
とつるあ月ひ所にしきハあれ此所
ハ無常あり紫ハきあるみを匂ひ合せし
名目なんとたあ五を古てせあるもとも良

句ノコト

自慕自弁の箱成へしあきらゝ
名目序てきをあ匂ゝるゝれハ句等
作りゝるなきハいて捨なんやせめゝや
詩陽詩あるよハ無ゝへし
一去き人のいゝるハ今ハ俳諧ハ今を生る
人ゝまて句我ゝ人ゝ其序みて
東てなきて扶ゝる句と人の句
を合きて見を以見我雪ふゝゝし
古人の風流をみるゝ人ハ其の境を

ぬ傷ふるそれハ信のなきとかゝれ
ゝ結句なる其例多し〳〵ハ源順
句楊玉環死歸唐帝思李夫人去漢皇
情は句なるなり数年をへたる
影乃なきを待る對雨窓月と云影
あるを的律詩の中ハ左の二句を出
せり淳中秀句乃さまあるとよみ
やまとうたに咲て咲て曰花猶繁
なりとゝ又すみたる秋を国基問ふな

ぐ玉壺をとんゆるかふるする空ハ降
かゝるね笛ておもひあけ人〳〵我ぬき
降の影を出し秀句の名とかゝ
某の加賀能句を川しかゝ影なる
しるあるに出るの能人前句を待く
後芸果あるを昔の能ハ志高ゆと
くハかゝるもの同名おもやめん
其のハさまにそ此開志しの句と
云俗語をきゝて人の志待をる

句ハてはなれて行くへ定まらぬ
心地ハ同し姿なれとも出せる句
ハのみなる判者の偏頗利心のつき
ゆへなる等閑なりとて駁して
より前句ハ刻みハまさまさ結ぶて
まもなく白川の深雪周章
似て似ぬ又ハ似ぬ
ようなれとも俊成乃うけ合
ようなれて物ハ
の似ようもいれとて小半ハ

路ハむかし山居ニ法つけおふる名乃
よし諸葛亮出師表ニ深く不毛ニ入
て今南方定人甲兵已ニ足りこの石も
ところも拔乃名を成しキ角句も
やまもう容易ニやむぬくといひおとし
めてりふへきすハあられぬ句格今尚多
きりしの於句百五十年計靈前ニ備 浪雑
享保元年甚
ともにいひ給ひし梅ちるあけ乃日
峰山の
書ける紙を
きみか京ハみるを見て婦れ続尾紙 記て

あけのとし 岑和且
宿ちまかおこなわれてきたるこそ
さくひたれ此書ハ宿ニ山近き玉江れ
菜の花乃世界ニ入る入はるか
かよ春日和尚之吟
春の月河原おりてハ春の月
北混士のたよりつてら鳴
連雛やてるみまいろとう川乃山
若狭路みて
花桜ハいかなき外科の住かれ

柳本大明神千家之祭
二月廿五日独吟一日千発句之巻頭

日は西に一人立ぬや千梅花
うぐひすや岩を踏ゆく水の上
鄙に聳川の匂ひは花ばかり
雉子鳴や雲に別るゝ不動堂
東山あり苔
あるあやめすゝ灯点的中
八幡に一あしあり雉子なき
春乃花蜆の息乃屋形哉

ゆく春に宿立花の形ばかり
ひとくさに花に行日を車道
廉あるを射を倦もやむさう
日は水に古あるあるやむめの花
享保七きさらぎ　伊丹座神事ぶく
あるかの春をあつけて去る月
仗者春者に乗込　蛙哉
きんぐりの乃の乃ばかりきたりみ
加賀男月君牡丹のあつけ去る
ねとるも哭て明るまて居るみ人

文章ありき咲ぬ花のこゝろあと
いひは叶ひしかさましおもひく
ゆ作る時の秋宮花叢二通称桂舟香
といふをおもひ出して

春ハ雨てはしらみ蝶の白ひぶ

白菜れ波の底みゆる顔みえけ子

川波乃そし細ちすハ梅のち

文輔りいふ毎稀をみてありあ
同日羅髪乃やあり寿逸く
奥り三月八日ちうかれハ夜の宇
を以祝之

雪残脱二つミ山やかゝるはさら

僧出せや九山ちるさと花乃上

梅咲や出ぬ家乃眠る理の前

二月之

昔日三十日に朋よ入やちるゝれらあり
宮堀離の人ゆきかて徐々子
二三尺わ挿よ移せ待さき
大家の二俵をとりへ風田うへ川
あそしこや孫子乃宮北鶴山
ふうもしや写々程もかしそ郭に
うつ川ミ火やさ涌く鐘とおまけ次

ほとゝぎす只一聲や初音哉

初夏の空をまゝ杜宇

一聲をきくや四月の末哉

ゆゝしさの紅乃口のそこ迄

押やる迄空しき後桐の実車

寒鳥のやゝ水ぬるき夕哉

（享保二年九月句とも後東之人之句も同初月之句）

あやめのかり海道百里の山

はるゝとて雪とゝまるやあやめ

一つまつりおそきを呵る蛙哉

四月星乃落るをむかふ蓮哉

杖を指雪まれ歩やさゝ川

享羽ゝ

蛍とは柳の糸とゝまるべし

絶ぬの紙にはれ亀と声ぬ音

下駄を云影を探りて

井戸ちるぬけ道八ツ月百

ちるめそのゆ弓張月や松ノ八

牛飼の七夕つくや初すゝ
川霧や雲をあけゆのぬ迹
生れる示ハ屋の河辺
六月や雲ハ南膳部別の圖
示ハ示後をむくあり さる
多つ さ此已を惜む 暑ハ
涼つ きの冨ハ ハ ハ 松ハ
を寳敷やりをあきて
信をとめてせんるも紀暑ハ

紫陽花ハ花の中ゆゑ之婦
茅ヶ菓此ゆゝハ昔ゝむる
初秋や手も信松藤も
地ゝ種つきぬ 女の東ハ
人ゝ明ゝ小和乃申山之の川
曲(ハニカミ)乃ゝみち此落も一和ハ
稲妻や風の明乃車信
いふつまにゆゝき農の本蕎
秋の冨ゝ生の夏僕
月を春日月を座山此冨ハ

眉くろ字絵ゝる時

十六夜や梅ゝ蘭草る　山ノ眉

利鎌の捨てゝ来た一ゝ茶

去ぬ月ノ水間ゝ遊ゝ　風ゝ宇

陽ゝて人ゝまれゝ秋ノ風

八朔吟

蕎ゝや今多吹ゝ風秋二月

ゝゝ雲の消ゝ枝ゝゝ

名月ノ野ゝ吹人ゝ引ゝ貌

名月や倚ゝ眠ゝ枕ゝ

ゝゝ引ゝ窓ゝ月華

名月の碎ゝ浪ゝ

月ゝ桂男ゝ

ゝ磨ゝ姫の身ゝ

文ノ月ゝ

雲ゝ対ゝ一ゝ月ゝ竹ノ風

ゝ人ゝ考ゝ世ゝ魂ゝ

風を吹ゝ

素保五の秋ゝ雄ゝ遊ゝ

刀祠の風ゝ怨ゝ

[illegible]れ秋を[illegible]や行[illegible]し
秋乃[illegible]れ[illegible]や秋[illegible]方
[illegible]ぬ[illegible]と[illegible]ぬ[illegible]
文章アリ略す
[illegible]ぬ日[illegible]て安[illegible]れ黄雛[illegible]
[illegible]時[illegible]を[illegible]科[illegible]し
[illegible]ハぬ[illegible]て安[illegible]れ黄[illegible]
日と[illegible]の一[illegible]
文章[illegible]略す
[illegible]人海も[illegible]のなら[illegible]ハ[illegible]
月[illegible]を[illegible]云[illegible]月[illegible]ハ
[illegible]し八月[illegible]し雲[illegible]月

来月ハ日蓮[illegible]乃月
[illegible]れ五[illegible]や花[illegible]
[illegible]放下師
竿の[illegible]や[illegible]は空
[illegible]命[illegible]
[illegible]正と[illegible]風なくハ[illegible]花
山蜂乃[illegible]ハいつ[illegible]て葉の[illegible]
享保元年の秋山[illegible]遊て
船引乃[illegible]尾花[illegible]

小豆撰る宮よりいつや庵の妻

一とせ雲消る旅立日

秋の蝶北斗ハはーとろ哉

ゆく羽千里も一丁のたゝき切忍

索緒（さゝ）ハ稚子生るとを待ん　中前

旅中

暁や戸の中ちらゝきり〳〵哉

人よむ翁旦夕至きぬの音

古鳥見の歌とゝねきり

○安達太郎根元此奇仙見立

宮城野東いとく荒れ

一人行き、何るや小萩ちり

伊勢乃人ゝ丹ゝを踏て酬あり

俳とハ今宮よりあり寒牡丹

初雪や富士ゝ嶽と名ぬ人ゝ

行き雪や何紙和仲の山ゝ

剃孫共山ハ見ゆ名月

常之居

炉よりて風ちき兎の信哉

菜花の星乃ごとや雨乃数
初しれ益〳〵祈れくるる
色香乃ときさるやや竹の雪
玉泉寺師東耕之時
風乱る欲雪乱れ枯尾花
炭俵し梅垣乃女ものゝ
太雪消炭を送りし人のもと
仙や堂とりきふとくる
日乃花をあてはなれ時雨

きく風ハさくみの広ちる夕雲ち
宇紙乃巻ふゆて雑髪ゆて
あるて紙宇とあるゝむ宇紙
句よ世ふもちるよ時雨のやうに
とりくるとるハ世ふもちるよ
宇紙ゆやとりふと時雨乃梅巻
海雲乃紙さハのゝ色きり
竹ふ巻ハ送る時ん
世ふもちる芭蕉のやうに
宇ゝ宇ゝ宇ゝ
めくるとつゝるる
宇ゝ歌
ひとりん乃ろつよ笑ぬかきん

年内立春

[illegible]娘の男　きやとの乃門

せいか

小舟を悼もうとの彼

卯くるみ　胡桃

二十[illegible]前[illegible]子の表徒を呂国と付き

[illegible]の比[illegible]乃影みて

白粥乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

一奥の細道乃ひ雑説集めるかゝ笑の金沢

一笑[illegible]世[illegible]乃退[illegible]義の句[illegible]

動[illegible]あ[illegible]ハ秋の風とあり又後河西

庵中[illegible]義作り九[illegible]と云もの祇[illegible]

[illegible]義乃[illegible]

茶[illegible]自ひ[illegible]句と表見て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]益の[illegible]益あ[illegible]

[illegible]時ハ訪[illegible]或と久[illegible]

あけぬのみんとて夜杖をつき笠ハ軽
花の雪をおすん　片ハ九条の菊
を倍ちんを乗てみとおるひのひて府中を
いろり先ん筋作り方へ音つまる内
ろう古ゆ方の大ろうハみなりて泣出せぬ
九条ハ百日計以前より昨日ハとうか
さらなりいひるる所の名乃無俗
却り何ぬいへおるれる死墓を乗
門さきて列本ろんさくよりて

九ハ若ろう去ぬ野ハ遠を
塚をろう計京近ろハ秋の風
手向ろをろとろを一笑ろ近ろハ秋しまち
ろを山句を出して世人鈴ハ京ハなあれ
我近声ハ秋しとハちしを以まろへ
れろ一情鬼神を虚空を高を春
へしろるおみてろんハろきとろろ
ろハ工を及ろる一字を襲ん又く乗温
ろいろへしろ紙ハろる名月を清光の

良寛の月をうたふ雪月と
奇妙乃一作うたあはせまゝきの旬く
俳諧ゝ
一てゝ久世戸ゆて志ゝ久珠芳の径
師ゆ志ゝ
あゝれハ或ハ泣或ハ笑ふ海
十三夜ハ須高ゝ月ハけ中て
ゆ世月ゆ
れ差狭乃ゝ越ゝ道ゝ

龍伯ゝ
唐崎伯受
鄙ゝ炉ゝ
腕ゝ
ゝ何者乃ゝ月ゝて真ある
芭の句俄稽ゝの鷹傳ゝ徒ゝ
流ハ高の句一句ゝて拾ゝ
芭ゝて芭乃ゝ
の時芭ゝ

といふ出意の句は「額」を何は持ん夕雲
と附らるとおもへあれハキ角いるハ意の句一句
まてお捨ゝるとまた絵の半てんの部しさ
あれとてれうき所見今をさの
離きをとひもてなさん昔らう附意
志みーーさるきをたてしめんこの乃
ゝきを教ゝ〳〵しいれるとて
一形式ゝ意の句一句まて止る意と
とあれたもうーー一句まて捨るのあり

さる久章ちすうまき紙萬同巻ま意の句
一句まて捨てもよ行巻百数之内同絵
ゝ意ト云て加る事ハ附ゝ付ゝ我
係とのゝ〳〵て偏鄙ゝまゝひを残せり
又意のて繁すくふれハ句ゝまゝ附
ら附意の句ゝけゝぬゝ所や
ゝ見ゝ山ゝるきゝて段の開のゝ
と読ゝゝ意る山の絵ゝ巻ゝと
いる意の部ゝいきれゝ意の句を

句中ニ云ル

一ツ書キ人ヲ以テ去氏格俗ノ字ヲ

題ノ下ニ置ハムカフイトヲ云ヲ

モケシキ俗語ヲトヲヲレテ

ヲヤシの思時ヲ句ノ中ニ入ハ

ヌモヨヲヘシ モミナイトヲヲ

ハ中ヲ由来アリトヘ意味天皇

ノナ九歳ヲ戊戌朝幸吉野宮時国

樔人来朝ス亦老翁蝦蟆 方江味名

毛弥トヲレヲ書キ味ヲ毛脇無ヲ

ナツハヤヲモムカイヲヲヘシ むとみとお

通ヲヲヲハ菊ヲ我さいんとりハ

ヲヲしとヲヲ例多ル 面目 原氏

冷泉 ヲヲの名ヲ賽銭ヲヲ称ク

ありヲヲヲ又都俗身ノヲヲ

ウヲヲヲ余風ヲ氏ヲ代 ヲヲ族離不

於族ヲヲヲヲハウヲの略ヲ大根

ヲ女兒ダイコトヲ雲林院安房院文字

昆布と又さひしいとを俗さまついと云
万葉ニ太宮處見ハ左丈思毛トよめり
婦人さみ
きちとも同のうるみのひき
あれいをつくるぬあやとりびあハ
きびすきびのあれ
一拾るとフテルともいふ大和ものうらの湯
掬つあうあることとをアシコト如乃
ふつうの多しいれ菜のあるあ
まんとをこと又俗ニ同タうとを云アイダしの

鮫魚を喰ふるものなし愛知郡と云ク魚の
ものなりといふすくてしはるハ好ま
を白ものあくきのしもうとをを求めて
用ふきあるいうを魚ふんとを同みて
ものをしはるを紙屑紙判ものうしはかし
をひるくあり嗜くきとをうり糞ハ滋五
穀ニ染きをとをんのようすを能
句成へれんの つをきハ玉とを
一をうをうをめ きえを染

名目の知れるものをあらはしてその外は
なつて八幡宮の句のあはれ侘て
化附句八巻しのを紫つきみも度
しをへ八月九日その中は月みしくうみ
きかえるまふすらくしきやなれか
みるまひもあらてのきの家もくるあは
ぬまくまふくいるひぬ間をもちふられ
おもふんうしおもくれもえしてきえも
とめねかりきんとうより外等の花うて

式アらおもひやうなり決してけれあり
ほとときれいるへくとハ純粋なる花をとん
定めおのれる決してうらうらる者乃附とこ
ろなんりて古きまとまりお句解釈
して不附ハ不附やとくいをうきたるの
やうおうれる又一流等成れ作者も
歌者おうるれハ実ねあるう一情一
いてあふへきや
たゝ家るとのまるぬるんとハ
おもひもよらぬいとすきぬ

岩にしみ入る蟬の声

の句の趣の多き乃声

と云正徹の哥のごとし

一嵩山石室之中に神人授法と云事遠

の意味にて義く以て是を世に伝く

甚深きに成ることを

一谷あり深きこと百尺甚広き事あり

世尊世尊は句と文章彩色成

あり けれども花の咲るごとし 渓

の橋を道あり三千里の三千里此平

路を行て芭蕉翁はこれを見ること

キ角なハ数千百尺の谷を訪きて一気

に登れあるごとく成て刹那入命を

ごとく成て紙なる風雪もなれ

へ一寺ふ堂ハ谷に成て中道を見れ

て来ごとく恐懼して行事なく

且他に一見ハ不知門生に事なあり

ごとくごとは三千里を行て百尺の

絶壁間道を辛ねて絶行

一付句ハ楊弓ニ似タル的ニ中リタル矢ハ二百ト三間トカヽリテ名ヲ失ハレタル中リハ遠ク的ニ及ブモノアルハ矢ト的トヲ捨テタルアラズ

然ルニ師ノ教ヘ世人ヲ導キ給フ二義ニ意ヲ注ギ給フ如ク当ニ以テスベシ

なれと師ノ法世界ヲ導キ給フ一流乃道理

かとき夜半春立湖水

永遠

享保八年二月廿日

要約ニ蜜前ニおゐて筆成事

半時庵

決定誌

大圭写之

半紙